

エコ・アプローチ造形としての フォト・グラヴィエール

－感光性樹脂版による凹版画の制作－

笹 井 弘

はじめに

版画には、凹版画と凸版画がある。凹版画は主に銅版画のことで薬品を使う場合がある。最近、版画教育の現場では、薬品を使わない環境に配慮した版画制作方法が重要なテーマとなっていると聞く。元々エコ・アプローチ造形をライフワークとして植物の能力を引き出す立体造形作品やそれらから派生した平面作品を制作発表してきた私にとって、水だけで製版できるフォト・グラヴィエールという技法は、作品の制作および研究に合致した技法と云える。

私が、フォト・グラヴィエールに出合ったのは、3年前都内にオープンしたモノクロギャラリーだった。しかし、後に分かったことではあるが、この技法で制作された作品は、1980年代から90年代の毎日新聞社主催「日本現代美術展」にある作家が頻繁に出品していた。それまでメゾチント(銅版画)やカメラ・オブスキュラ(ピンホール写真)を制作してきた私には、エコ・アプローチ造形として扱えること、モノクロ表現であること以上にこの版画技法に興味を持てた。多分それは、写真撮影した時の被写体のイメージがそのまま表現できると思えたからである。

この技法は、美術大学の版画研究室の集中講義や横浜美術館の講座で体験可能だが、残念ながら受講の機会に巡り合うことは無く、技術的なことは版画家の個展のオープニングパーティーや時には作品を購入して作家から話を聞き出した。その結果得られた断片的な情報や技術を結び付け機器を自作し、失敗を繰り返してデータを取り、ようやく見るに耐える作品を何点か完成させることができた。

そこで、2017年2月のこの版画技法による「アート・ギャラリー・閑々居」での画廊企画「笹井弘・ものたちへのレクイエム」展に際し、作品と研究成果をまとめた。加えて、同時進行で制作を再開していたしていた未発表の「植物たちの時間」シリーズ作品も掲載した。



1. 制作に必要な機器と道具

1. デジタルカメラ(プリント写真でも可)
2. Adobe Photoshop
3. 暗室
4. 手作りUV露光器と露光用具と水洗い用具(写真1)

感光樹脂プレート(写真2)

露光器：ケミカラランプ30ワット×4本使用



写真1



写真2

富士トレリーフ(WS-HIIタイプ)	
基 盤	スチール製 用途：文字・写真版・ドライオフセット
露 光	ケミカル灯：光源までの5cm、露光時間3-6分距離
ブラシ式洗い出し時間	0.5-3.0分
最適温度	20-25度
後処理間相互、主露光と同程度の露光を行うことで硬化する	
(東レ株式会社 富士トレリーフ使用説明書より抜粋)	

2. 制作手順

●写真撮影

ピンホール写真から継続してのテーマ「ものたちへのレクイエム」シリーズのモチーフを探す。カメラと三脚を持って、廃物や忘れ去られた物たちを山間部の集落のはずれや海岸に捨てられた物たちから見つけ出す。今では、集落で忘れ去られた物たちを捜すことはとても効率が悪い。見つからないのである。ゴミを片づけ清潔にする習慣やゴミのリサイクルが完備したことなどが理由として考えられる。そこで日本海や太平洋に出かけ、流れ着いた自然が変形やキズや色褪せを与えた物(缶、ペットボトル、靴など)を持ち帰り自作撮影台に並べて撮影した。(写真4-9)

●ポジと版の制作

カメラからデータを取り込んだ画像は、解析度、明るさやコントラストを版画用に調整した後、白黒に変換さらにドットに変換しレーザープリンターで普通紙にポジ印刷を試す。問題がなければOHP用紙に印刷する。これが感光樹脂版へのUV露光用ポジフィルムとなる。但し、プリントサイズの違いによりドットに不必要なパターンが発生することがあり版画にした時にパターンが残ってしまうことがある。これは未だ解決されていない。(写真3)

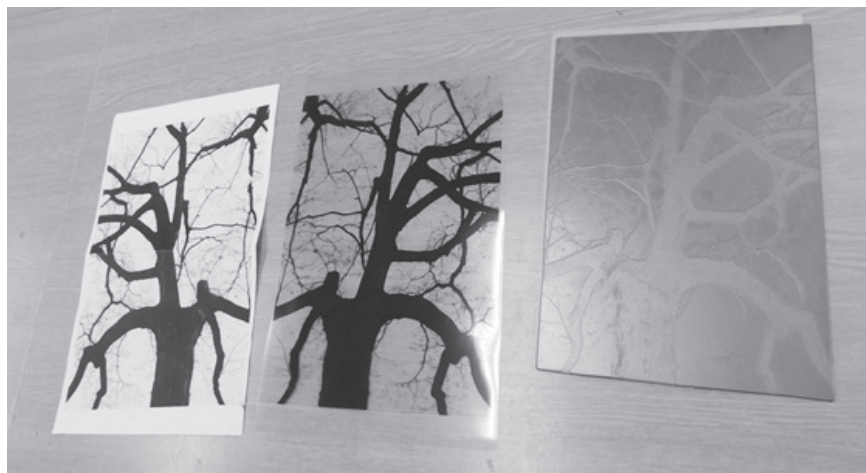


写真3

左：ポジ試し

中：OHP ポジ

右：完成した感光樹脂反



写真 4



写真 5

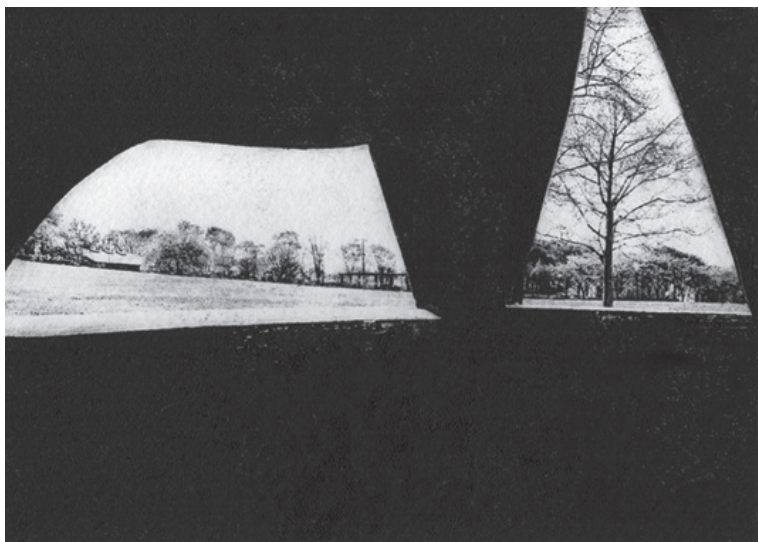


写真6

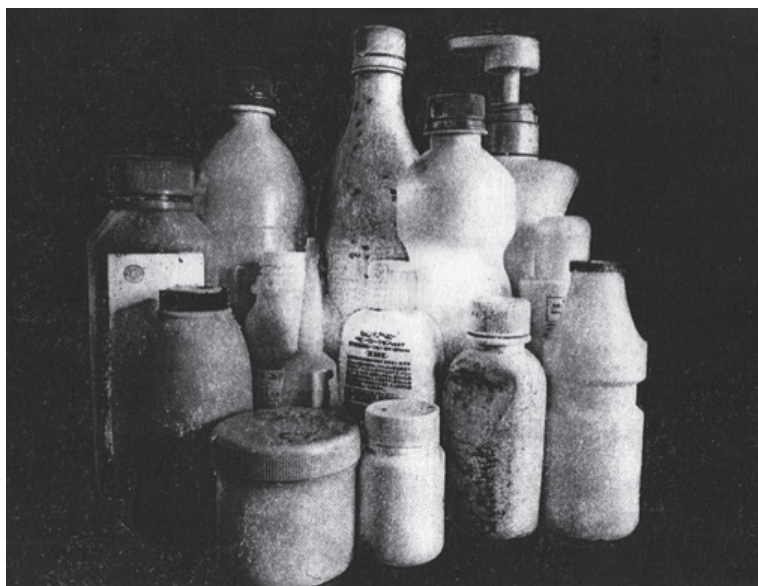


写真7

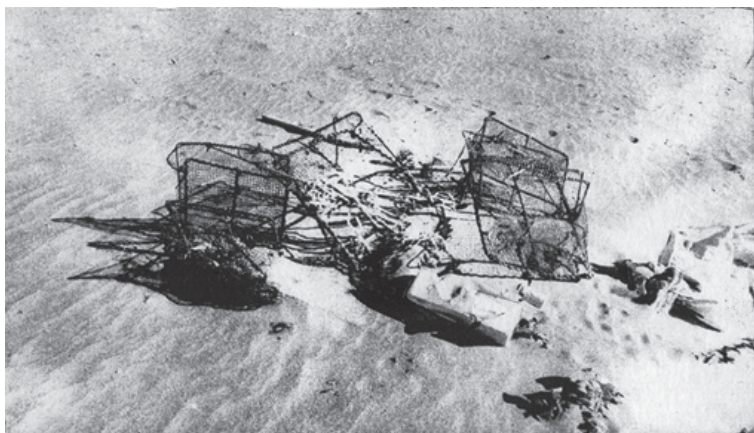


写真8

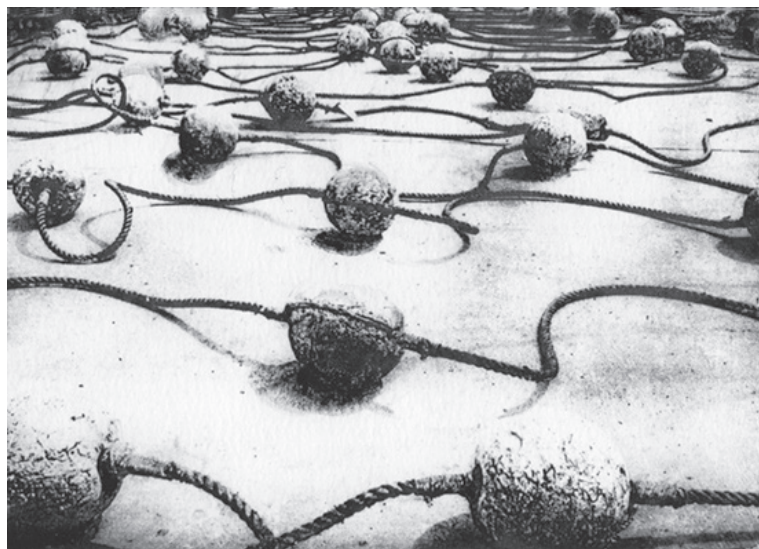


写真9

「植物達の時間」シリーズ(写真10-13)



写真 10 茅野・神戸八幡

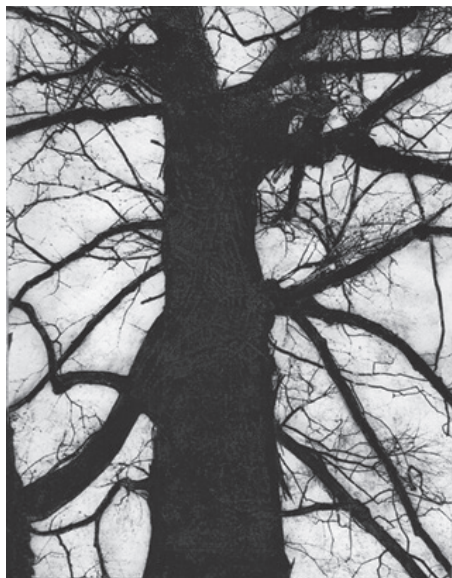


写真 11 茅野・神戸八幡



写真 12 川崎・聖公園



写真 13 山梨・白州

おわりに

美術大学や美術館で講習を受けるなどして、フォト・グラヴィエールの版画技法を習得した美術関係者は多いと思われる。しかし、継続する人は少ない。

写真家は、もうひと手間をかけて版画にする必要を見出さない。また、版画技術がある人は、自らの技術の見せ所が無いこの技法が不満である。私の様に①エコ・アプローチ造形として位置づけが出来ること②印画紙写真から紙とインクで物にしたいこと③特段の版画技術が無いこと、この三拍子揃ったことが継続制作を可能にしていると思う。

「植物達の時間」シリーズ(写真10-13)に登場する裸の木は、葉を付けている時は見られない木の骨格や性格、そしてモノクロにした時に初めて現れるシルエットの形態が魅力的だ。あちこちに作品にしたい木を捜してある。次の冬の到来が待ちどろしい。